



下伊敷・栄門地区が団結

バザールで活性化狙う

鹿児島市下伊敷1丁目の栄門地区一帯に活気を取り戻そうと、地元の栄門通り会（宇都正博会長）や町内会が中心となって「栄門まちぐるみバザール」を始めた。2回目の17日は、栄門公園や周辺の国道3号に市内外の約60店が軒を連ね、通りを歩く家族連れでにぎわった。

同地区はかつて鹿児島起。「気軽に集えるマ島歩兵第45連隊があり、戦後は文教地区として栄えた。しかし、国立病院伊敷分院の移転（1984年）や市電伊敷線の廃止（85年）、8・6水害（93年）などで次第に空き店舗が増え、店主の高齢化や後継者難もあって、昔のような活気はなくなったという。

近くにある鹿児島工業高校の生徒の協力で、会場で使う物販用テントや黒板を、出店者らとワークショップ形式で手作り。5月中旬、第1回の催しを栄門公園で開いた。

会場ではスイーツや軽食の販売、フリーマーケット、ワークショップがあり、音楽と子どもたちの歓声が響いた。地区の歴史を紹介する展示もあり、来場者の関心を集めた。

「バス停からドラムの音に誘われてきた。にぎやかでいい。イベントを機に活気づいてくれたら」と話す。

こうした状況に、通り会会員らが一念発起して開催。周辺の国道3号沿いにもエリアを拡大し、店舗の軒先や駐車場に出店が並んだ。

バザールは今後も5月と11月に開く予定。実行委員長の坂口喜代美さん（58）は「将来は日常的に栄門を歩いてもらい、空き店舗への入居や街の魅力を感じる機会につなげたい」と語った。

（入角里絵子）

り会会員らが一念発

こうした状況に、通

短期大学の県大祭に合

中和美さん（76）は「近